

M E S O R A G E

四大学連携福岡コンソーシアム
東アジア環境研究機構特任教授

小寺山 亘

Wataru Koterayama



私はここ数年、九州大学の様々なプロジェクトに参加し、アジア諸国を訪問することが多く、その際各国の環境・エネルギー事情をつぶさに見てきました。アジア諸国の急速な経済発展に伴って、交通機関・工場・発電所などによる環境汚染は凄まじいものであり、その速度と規模は世界歴史上かつて人類が経験したことがないほどの急激なものであります。また環境悪化の結果は発展途上にあるアジア諸国は勿論のこと、先進国に数えられる日本・韓国ひいては世界中の国々が被害を受けるものであります。

一方、アメリカのサブプライムローンの破綻をきっかけとした世界的経済不況はアジア諸国の経済発展によって、辛くも危機を脱しつつあります。まさに世界的規模でアジア諸国による経済的恩恵と環境問題は表裏一体であると認識されつつあります。

一方わが国は一足早く経済発展を遂げたが、その過程において環境問題の克服は最重要課題とされてきたし、ある程度の成功を収めたと言えます。その環境技術は世界のトップレベルにあると言えます。ただしその過程において、水俣・四日市に見られるような多大な被害を国民に与えてきたことも事実です。もし、アジア諸国の現状を放置するならば、その被害の規模も、またグローバルなものになることは必然であります。特に我が国は大気については偏西風、海洋では黒潮と対馬暖流などの作用によって直接の影響を受けています。特に九州はすでに光化学スモッグの発生や越前クラゲの大発生による漁業被害などを受けています。

国際的な環境問題は経済発展の負の側面であるだけに政治問題化しやすく、国家間の協力関係は単刀直入には行き難いのです。現在の温暖化ガス排出規制における先進国と発展途上国の対立はその典型的な例であります。古くはヨーロッパにおいてドイツ・英国の北欧諸国への越境大気汚染の解決には科学的な知見の集積がキーポイントであったように、世界中の研究者の協力が不可欠であると考えられます。

九州大学はアジアにもっとも近い研究重点大学であり、環境・エネルギー研究においても優れた研究者を多数擁しています。平成20年度には「東アジア環境研究機構」設立し、東アジアの環境問題に先進的に取り組んでいますし、環境・エネルギーを主題とする4大学連携(福岡工業大学、九州大学、西南大学、福岡女子大学)福岡コンソーシアムの重要メンバーでもあります。またその立地する北部九州は古くから石炭産業・重工業の中心であったし、それに伴う環境問題の克服にもっとも先進的な役割を果たしてきました。

九州大学グローバルCOEプログラム「新炭素資源学」の設立は以上の流れの中で必然であったし、まさに歴史的使命を帯びていると言っても過言ではないでしょう。世界の環境・エネルギー分野の教育研究の拠点として、優れた研究者を糾合し、ネットワークの中心として機能することや有為な人材の育成が強く望まれています。